

議案第 88 号

調布市税賦課徴収条例等の一部を改正する条例

上記の議案を提出する。

平成 28 年 9 月 2 日

提出者 調布市長 長 友 貴 樹

提案理由

地方税法等の一部改正に伴い、個人の市民税について医療費控除の特例を設けるとともに再生可能エネルギー発電設備に係る固定資産税の課税標準の特例割合を定めるほか、所要の改正及び規定の整備を行うため、提案するものであります。

調布市税賦課徴収条例等の一部を改正する条例

(調布市税賦課徴収条例の一部改正)

第1条 調布市税賦課徴収条例(昭和30年調布市条例第10号)の一部を次のように改正する。

第19条各号列記以外の部分中「及び第2号」を「, 第2号及び第5号」に, 「当該各号に掲げる」を「第1号から第4号までに掲げる期間並びに第5号及び第6号に掲げる日までの」に改め, 同条第2号中「第46条第1項の申告書(法第321条の8第1項, 第2項, 第4項又は第19項の規定による申告書に限る。), 」を削り, 同条第3号中「第46条第1項の申告書(法第321条の8第22項及び第23項の申告書を除く。), 」を削り, 同条に次の2号を加える。

(5) 第46条第1項の申告書(法第321条の8第1項, 第2項, 第4項又は第19項の規定による申告書に限る。)に係る税額(次号に掲げるものを除く。) 当該税額に係る納期限の翌日から1月を経過する日

(6) 第46条第1項の申告書(法第321条の8第22項及び第23項の申告書を除く。)でその提出期限後に提出したものに係る税額 当該提出した日又はその日の翌日から1月を経過する日

第41条の2第1項中「規定によって」を「規定により」に, 「においては」を「には」に, 「次項」を「この条」に改め, 同条第2項中「次項」を「次項及び第4項」に改め, 同条第3項中「変更し」を「変更し, 」に, 「から第1項」を「から同項」に改め, 同条に次の1項を加える。

4 第2項の場合において, 所得税の納税義務者が修正申告書を提出し, 又は国の税務官署が所得税の更正(納付すべき税額を増加させるもの)に限り, これに類するものを含む。以下この項において「増額更正」とい

う。)をしたとき(国の税務官署が所得税の更正(納付すべき税額を減少させるもの)に限り、これに類するものを含む。以下この項において「減額更正」という。)をしたことに基因して、第1項の規定によりその賦課した税額が減少した後に、その賦課した税額が増加したときに限る。)は、その追徴すべき不足税額(当該減額更正前に賦課した税額から当該減額更正に基因して変更した税額を控除した金額(還付金の額に相当する税額を含む。))に達するまでの部分に相当する税額に限る。以下この項において同じ。)については、次の各号に掲げる期間(令第48条の9の9第4項各号に掲げる市民税にあつては、第1号に掲げる期間に限る。)を延滞金の計算の基礎となる期間から控除する。

- (1) 第39条の各納期限の翌日から当該減額更正に基因して変更した税額に係る納税通知書が発せられた日までの期間
- (2) 当該減額更正に基因して変更した税額に係る納税通知書が発せられた日(当該減額更正が更正の請求に基づくものである場合には、同日の翌日から起算して1年を経過する日)の翌日から増額更正に基因して変更した税額に係る納税通知書が発せられた日までの期間

第46条第3項及び第4項中「の申告書」を「に規定する申告書」に、「場合で」を「場合において、」に改め、同条第6項を同条第7項とし、同条第5項を同条第6項とし、同条第4項の次に次の1項を加える。

- 5 第3項の場合において、法第321条の8第22項に規定する申告書(以下この項において「修正申告書」という。)の提出があつたとき(当該修正申告書に係る市民税について同条第1項、第2項、第4項又は第19項に規定する申告書(以下この項において「当初申告書」という。)が提出されており、かつ、当該当初申告書の提出により納付すべき税額を減少させる更正(これに類するものを含む。以下この項において「減額更正」という。)があつた後に、当該修正申告書が提出されたときに限る。)は、当該修正申告書の提出により納付すべき税額(当該当初申告書に係る税額(還付金の額に相当する税額を含む。))に達するまでの部分に相当する税額に限る。)については、次の各号に掲げる期間(詐偽その他不正の行為により市民税を免れた法人が法第321条の

1 1 第 1 項又は第 3 項の規定による更正があるべきことを予知して提出した修正申告書に係る市民税又は令第 4 8 条の 1 6 の 2 第 3 項に規定する市民税にあつては、第 1 号に掲げる期間に限る。)を延滞金の計算の基礎となる期間から控除する。

- (1) 当該当初申告書の提出により納付すべき税額の納付があつた日(その日が当該申告に係る市民税の納期限より前である場合には、当該納期限)の翌日から当該減額更正の通知をした日までの期間
- (2) 当該減額更正の通知をした日(当該減額更正が、更正の請求に基づくもの(法人税に係る更正によるものを除く。)である場合又は法人税に係る更正(法人税に係る更正の請求に基づくものに限る。))によるものである場合には、当該減額更正の通知をした日の翌日から起算して 1 年を経過する日)の翌日から当該修正申告書を提出した日(法第 3 2 1 条の 8 第 2 3 項の規定の適用がある場合において、当該修正申告書がその提出期限前に提出されたときは、当該修正申告書の提出期限)までの期間

第 4 6 条の 2 第 2 項中「についても」を「がある場合には、」に、「によるものとする。なお」を「とし」に、「ときは」を「場合には」に改め、同条第 3 項中「の申告書」を「に規定する申告書」に、「場合にあつては」を「場合には」に、「受けたこと」を「受けたこと。次項第 2 号において同じ。」に改め、同条に次の 1 項を加える。

- 4 第 2 項の場合において、法第 3 2 1 条の 8 第 2 2 項に規定する申告書(以下この項において「修正申告書」という。)の提出があつたとき(当該修正申告書に係る市民税について同条第 1 項、第 2 項、第 4 項又は第 1 9 項に規定する申告書(以下この項において「当初申告書」という。)が提出されており、かつ、当該当初申告書の提出により納付すべき税額を減少させる更正(これに類するものを含む。以下この項において「減額更正」という。)があつた後に、当該修正申告書が提出されたときに限る。)は、当該修正申告書の提出により納付すべき税額(当該当初申告書に係る税額(還付金の額に相当する税額を含む。))に達するまでの部分に相当する税額に限る。)については、次の各号に掲げる期

間（詐偽その他不正の行為により市民税を免れた法人が提出した修正申告書に係る市民税又は令第48条の15の5第3項に規定する市民税にあっては、第1号に掲げる期間に限る。）を延滞金の計算の基礎となる期間から控除する。

- (1) 当該当初申告書の提出により納付すべき税額の納付があった日（その日が当該申告に係る市民税の納期限より前である場合には、当該納期限）の翌日から当該減額更正の通知をした日までの期間
- (2) 当該減額更正の通知をした日（当該減額更正が、更正の請求に基づくもの（法人税に係る更正によるものを除く。）である場合又は法人税に係る更正（法人税に係る更正の請求に基づくものに限る。）によるものである場合には、当該減額更正の通知をした日の翌日から起算して1年を経過する日）の翌日から当該修正申告書に係る更正の通知をした日までの期間

附則第6条を次のように改める。

（特定一般用医薬品等購入費を支払った場合の医療費控除の特例）

第6条 平成30年度から平成34年度までの各年度分の個人の市民税に限り、法附則第4条の4第3項の規定に該当する場合における第34条の2の規定による控除については、その者の選択により、同条中「同条第1項」とあるのは「同条第1項（第2号を除く。）」と、「まで」とあるのは「まで並びに法附則第4条の4第3項の規定により読み替えて適用される法第314条の2第1項（第2号に係る部分に限る。）」として、同条の規定を適用することができる。

附則第10条の2中第7項を第12項とし、第6項を第11項とし、第5項を第10項とし、第4項の次に次の5項を加える。

- 5 法附則第15条第33項第1号イに規定する設備について同号に規定する条例で定める割合は、3分の2とする。
- 6 法附則第15条第33項第1号ロに規定する設備について同号に規定する条例で定める割合は、3分の2とする。
- 7 法附則第15条第33項第2号イに規定する設備について同号に規定する条例で定める割合は、2分の1とする。

8 法附則第15条第33項第2号ロに規定する設備について同号に規定する条例で定める割合は、2分の1とする。

9 法附則第15条第33項第2号ハに規定する設備について同号に規定する条例で定める割合は、2分の1とする。

附則第20条の2第1項中「同法」を「租税条約等実施特例法」に改め、同条第2項第1号中「第20条の2」を「第20条の3」に改め、同項第2号中「、第34条の8第1項、附則第7条第1項、附則第7条の3第1項及び附則」を「及び第34条の8第1項並びに附則第7条第1項、第7条の3第1項及び」に、「第20条の2」を「第20条の3」に改め、同項第3号中「第20条の2」を「第20条の3」に、「租税条約等実施特例法」を「租税条約等の実施に伴う所得税法、法人税法及び地方税法の特例等に関する法律（昭和44年法律第46号）」に、「補てん」を「補填」に改め、同項第4号中「第20条の2」を「第20条の3」に改め、同条第3項中「第33条及び」を「同条及び」に、「同法」を「租税条約等実施特例法」に改め、同条第5項第1号中「第20条の2第3項」を「第20条の3第3項後段」に改め、同項第2号中「、第34条の8第1項、附則第7条第1項、附則第7条の3第1項及び附則」を「及び第34条の8第1項並びに附則第7条第1項、第7条の3第1項及び」に、「第20条の2第3項」を「第20条の3第3項後段」に改め、「、第34条の8第1項中「第33条第4項」とあるのは「附則第20条の2第4項」と」を削り、同項第3号中「第20条の2第3項」を「第20条の3第3項後段」に、「租税条約等実施特例法」を「租税条約等の実施に伴う所得税法、法人税法及び地方税法の特例等に関する法律（昭和44年法律第46号）」に、「又は配当所得」を「若しくは配当所得」に改め、同項第4号中「第20条の2第3項」を「第20条の3第3項後段」に改め、同条第6項中「第20条の2第3項」を「第20条の3第3項前段」に改め、同条を附則第20条の3とし、附則第20条の次に次の1条を加える。

（特例適用利子等及び特例適用配当等に係る個人の市民税の課税の特例）  
第20条の2 所得割の納税義務者が支払を受けるべき外国居住者等の所得に対する相互主義による所得税等の非課税等に関する法律（昭和37

年法律第144号。以下「外国居住者等所得相互免除法」という。)第8条第2項に規定する特例適用利子等,外国居住者等所得相互免除法第12条第5項に規定する特例適用利子等又は外国居住者等所得相互免除法第16条第2項に規定する特例適用利子等については,第33条及び第34条の3の規定にかかわらず,他の所得と区分し,その前年中の外国居住者等所得相互免除法第8条第2項(外国居住者等所得相互免除法第12条第5項及び第16条第2項において準用する場合を含む。)に規定する特例適用利子等の額(以下この項において「特例適用利子等の額」という。)に対し,特例適用利子等の額(次項第1号の規定により読み替えられた第34条の2の規定の適用がある場合には,その適用後の金額)に100分の3の税率を乗じて計算した金額に相当する市民税の所得割を課する。

- 2 前項の規定の適用がある場合には,次の各号に定めるところによる。
  - (1) 第34条の2の規定の適用については,同条中「総所得金額」とあるのは,「総所得金額,附則第20条の2第1項に規定する特例適用利子等の額」とする。
  - (2) 第34条の5,第34条の6,第34条の7及び第34条の8第1項並びに附則第7条第1項,第7条の3第1項及び第7条の3の2第1項の規定の適用については,第34条の5中「所得割の額」とあるのは「所得割の額及び附則第20条の2第1項の規定による市民税の所得割の額」と,第34条の6第1項前段,第34条の7及び第34条の8第1項並びに附則第7条第1項,第7条の3第1項及び第7条の3の2第1項中「所得割の額」とあるのは「所得割の額並びに附則第20条の2第1項の規定による市民税の所得割の額」と,第34条の6第1項後段中「所得割の額」とあるのは「所得割の額及び附則第20条の2第1項の規定による市民税の所得割の額の合計額」とする。
  - (3) 第35条の規定の適用については,同条中「又は山林所得金額」とあるのは「若しくは山林所得金額又は附則第20条の2第1項に規定する特例適用利子等の額」と,「若しくは山林所得金額」とあるのは「若しくは山林所得金額若しくは外国居住者等の所得に対する相互主

義による所得税等の非課税等に関する法律（昭和37年法律第144号）第7条第10項（同法第11条第8項及び第15条第14項において準用する場合を含む。）に規定する特定対象利子に係る利子所得の金額，同法第7条第12項（同法第11条第9項及び第15条第15項において準用する場合を含む。）に規定する特定対象収益分配に係る配当所得の金額，同法第7条第16項（同法第11条第11項及び第15条第17項において準用する場合を含む。）に規定する特定対象懸賞金等に係る一時所得の金額若しくは同法第7条第18項（同法第11条第12項及び第15条第18項において準用する場合を含む。）に規定する特定対象給付補填金等に係る雑所得等の金額」とする。

- (4) 附則第5条の規定の適用については，同条第1項中「山林所得金額」とあるのは「山林所得金額並びに附則第20条の2第1項に規定する特例適用利子等の額」と，同条第2項中「所得割の額」とあるのは「所得割の額並びに附則第20条の2第1項の規定による市民税の所得割の額」とする。

- 3 所得割の納税義務者が支払を受けるべき外国居住者等所得相互免除法第8条第4項に規定する特例適用配当等，外国居住者等所得相互免除法第12条第6項に規定する特例適用配当等又は外国居住者等所得相互免除法第16条第3項に規定する特例適用配当等（次項において「特例適用配当等」という。）については，第33条第3項及び第4項の規定は適用しない。この場合において，当該特例適用配当等については，同条及び第34条の3の規定にかかわらず，他の所得と区分し，その前年中の外国居住者等所得相互免除法第8条第4項（外国居住者等所得相互免除法第12条第6項及び第16条第3項において準用する場合を含む。）に規定する特例適用配当等の額（以下この項において「特例適用配当等の額」という。）に対し，特例適用配当等の額（第5項第1号の規定により読み替えられた第34条の2の規定の適用がある場合には，その適用後の金額）に100分の3の税率を乗じて計算した金額に相当する市民税の所得割を課する。



- 4 前項後段の規定は，特例適用配当等に係る所得が生じた年の翌年の4月1日の属する年度分の第36条の2第1項の規定による申告書（その提出期限までに提出されたもの及びその提出期限後において市民税の納税通知書が送達される時までに提出されたものに限り，その時までに提出された第36条の3第1項に規定する確定申告書を含む。）に前項後段の規定の適用を受けようとする旨の記載があるとき（これらの申告書にその記載がないことについてやむを得ない理由があると市長が認めるときを含む。）に限り，適用する。
- 5 第3項後段の規定の適用がある場合には，次の各号に定めるところによる。
- (1) 第34条の2の規定の適用については，同条中「総所得金額」とあるのは，「総所得金額，附則第20条の2第3項後段に規定する特例適用配当等の額」とする。
  - (2) 第34条の5，第34条の6，第34条の7及び第34条の8第1項並びに附則第7条第1項，第7条の3第1項及び第7条の3の2第1項の規定の適用については，第34条の5中「所得割の額」とあるのは「所得割の額及び附則第20条の2第3項後段の規定による市民税の所得割の額」と，第34条の6第1項前段，第34条の7及び第34条の8第1項並びに附則第7条第1項，第7条の3第1項及び第7条の3の2第1項中「所得割の額」とあるのは「所得割の額並びに附則第20条の2第3項後段の規定による市民税の所得割の額」と，第34条の6第1項後段中「所得割の額」とあるのは「所得割の額及び附則第20条の2第3項後段の規定による市民税の所得割の額の合計額」とする。
  - (3) 第35条の規定の適用については，同条中「又は山林所得金額」とあるのは「若しくは山林所得金額又は附則第20条の2第3項後段に規定する特例適用配当等の額」と，「若しくは山林所得金額」とあるのは「若しくは山林所得金額若しくは外国居住者等の所得に対する相互主義による所得税等の非課税等に関する法律（昭和37年法律第144号）第7条第14項（同法第11条第10項及び第15条第

16項において準用する場合を含む。)に規定する申告不要特定対象  
配当等に係る利子所得の金額若しくは配当所得の金額」とする。

- (4) 附則第5条の規定の適用については、同条第1項中「山林所得金額」とあるのは「山林所得金額並びに附則第20条の2第3項後段に規定する特例適用配当等の額」と、同条第2項中「所得割の額」とあるのは「所得割の額並びに附則第20条の2第3項後段の規定による市民税の所得割の額」とする。

(調布市税賦課徴収条例等の一部を改正する条例の一部改正)

第2条 調布市税賦課徴収条例等の一部を改正する条例(平成27年調布市条例第43号)の一部を次のように改正する。

附則第3条第7項の表以外の部分中「,改正後の条例」を「,調布市税賦課徴収条例」に、「掲げる改正後の条例」を「掲げる同条例」に改め、同表第19条第3号の項中「第46条第1項の申告書(法第321条の8第22項及び第23項の申告書を除く。),」を削る。

## 附 則

(施行期日)

第1条 この条例は、公布の日から施行する。ただし、次の各号に掲げる規定は、当該各号に定める日から施行する。

- (1) 第1条中調布市税賦課徴収条例第19条,第41条の2,第46条及び第46条の2の改正規定並びに附則第20条の2の改正規定及び同条を附則第20条の3とし、附則第20条の次に1条を加える改正規定並びに第2条の規定並びに次条第1項,第3項及び第4項の規定 平成29年1月1日

- (2) 第1条中調布市税賦課徴収条例附則第6条の改正規定及び次条第2項の規定 平成30年1月1日

(市民税に関する経過措置)

第2条 第1条の規定による改正後の調布市税賦課徴収条例(以下「改正後の条例」という。)第41条の2第4項の規定は、前条第1号に掲げる規

定の施行の日以後に改正後の条例第41条の2第2項に規定する納期限が到来する個人の市民税に係る延滞金について適用する。

2 改正後の条例附則第6条の規定は，平成30年度以後の年度分の個人の市民税について適用する。

3 改正後の条例第46条第5項及び第46条の2第4項の規定は，前条第1号に掲げる規定の施行の日以後に改正後の条例第46条第3項又は第46条の2第2項に規定する納期限が到来する法人の市民税に係る延滞金について適用する。

4 改正後の条例附則第20条の2の規定は，前条第1号に掲げる規定の施行の日以後に支払を受けるべき外国居住者等の所得に対する相互主義による所得税等の非課税等に関する法律（昭和37年法律第144号）第8条第2項に規定する特例適用利子等，同法第12条第5項に規定する特例適用利子等若しくは同法第16条第2項に規定する特例適用利子等又は同法第8条第4項に規定する特例適用配当等，同法第12条第6項に規定する特例適用配当等若しくは同法第16条第3項に規定する特例適用配当等に係る個人の市民税について適用する。

（固定資産税に関する経過措置）

第3条 改正後の条例附則第10条の2第5項の規定は，平成28年4月1日以後に新たに取得される地方税法等の一部を改正する等の法律（平成28年法律第13号）第1条の規定による改正後の地方税法（昭和25年法律第226号。以下「改正後の法」という。）附則第15条第33項第1号イに規定する設備に対して課する平成29年度以後の年度分の固定資産税について適用する。

2 改正後の条例附則第10条の2第6項の規定は，平成28年4月1日以後に新たに取得される改正後の法附則第15条第33項第1号ロに規定する設備に対して課する平成29年度以後の年度分の固定資産税について適用する。

3 改正後の条例附則第10条の2第7項の規定は，平成28年4月1日以後に新たに取得される改正後の法附則第15条第33項第2号イに規定する設備に対して課する平成29年度以後の年度分の固定資産税について適

用する。

4 改正後の条例附則第10条の2第8項の規定は，平成28年4月1日以後に新たに取得される改正後の法附則第15条第33項第2号ロに規定する設備に対して課する平成29年度以後の年度分の固定資産税について適用する。

5 改正後の条例附則第10条の2第9項の規定は，平成28年4月1日以後に新たに取得される改正後の法附則第15条第33項第2号ハに規定する設備に対して課する平成29年度以後の年度分の固定資産税について適用する。